

2022 年 3 月

「倫理学紀要」第 29 輯 抜刷

悲観する快樂主義
——キュレネ派のヘゲシアス訳註——

長 尾 柊 輝

悲観する快樂主義 ——キュレネ派のヘゲシアス訳註——

長 尾 枉 輝

はじめに

本稿では、キュレネ派（= Cyr.）の思想家ヘゲシアス（= Heg.）に関する全現存証言の翻訳・註解を行う。彼の思想は、「悲観論」と「快樂主義」という刺激的な取り合わせのゆえ、古代思想史研究の圏外からも少なからぬ関心を集めてきた¹。その一方で、Giannantoni による現行の証言集（SSR, IVF; 1990）は、刊行三十年を迎えるに及び、若干の改訂を要するものとなりつつある²。こうした状況を受けて本稿は、欧米圏における個別研究の現状を踏まえた新しい証言集を、充実した訳註³とともに再提示することを目指す⁴。これは同時に、Heg. という異色の思想家を日本にまとまった形で紹介するはじめての試みともなるであろう。

彼の思想を取り上げる固有の意義としては、とりわけ、次の二点を挙げることができる。

1. 上述のとおり、Heg. の悲観論は、快樂主義と密着しているかぎりにおいて、類例の少ない貴重な研究材料である。Cyr. の快樂主義は、Heg. において破綻したのか、それとも完成したのか。悲観論の胚芽は、快樂主義に内在していたのか、それとも外在していたのか。——その他、多くの論点が想定されうる。本稿は、こうした諸論点に取り組んでゆくための基本資料を提供するものにほかならない。

2. Heg. の思想内容をめぐる「通説」は、しばしば過剰な読み込みや曲解をともなったものである。「聴講者に自殺を勧めた」という言説がその典型で、わが国における稀少な（とはいえ単に挿話的な）紹介者のひとり澁澤龍彦も、Heg. が「本気で、友だちに自殺をすすめて歩いた」（1996: 80）と書いている。こうした曲解・誇張を取り除くための方途としては、原典そのものの参照・吟味が最も有効であろう。

訳註の構成としては、1. テキストと翻訳、2. 資料の性質、3. 註解を、この順番で提示する。煩瑣を避けるため、校本に記載された異読情報については、重要な例のみを2および3で紹介する形式をとった。また、各証言の配列は本稿独自のものであるが、参照の便宜を図るため、SSRの対応番号を併記した。

T. 1 系譜的位置づけ

T. 1A: デイオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』2.85-6 = SSRIVA160, 172 (Dorandi, 2013)

ἡμεῖς δ' ἐπειδὴ τὸν βίον ἀνεγράψαμεν αὐτοῦ, φέρε νῦν διέλθωμεν τοὺς ἀπ' αὐτοῦ Κυρηναϊκοὺς, οἵτινες ἐαυτοὺς οἱ μὲν Ἥγησιακοὺς, οἱ δὲ Ἀννικερείους, οἱ δὲ Θεοδωρείους προσωνόμαζον. [...] ἔχει δ' οὕτως: Ἀριστίππου διήκουσεν ἡ θυγάτηρ Ἀρήτη καὶ Αἰθίοψ Πτολεμαεὺς καὶ Αντίπατρος Κυρηναῖος· Ἀρήτης δὲ Ἀρίστιππος ὁ Μητροδίδακτος ἐπικληθεὶς, οὗ Θεόδωρος ὁ Ἄθεος, εἴτα Θεός· Αντιπάτρου δ' Ἐπιτιμίδης Κυρηναῖος, οὗ Παραβάτης, οὗ Ἥγησίας ὁ Πεισιθάνατος καὶ Ἀννίκερις ὁ Πλάτωνα λυτρωσάμενος. οἱ μὲν οὖν ἐπὶ τῆς ἀγωγῆς τῆς Ἀριστίππου μείναντες καὶ Κυρηναῖοι προσαγορευθέντες δόξαις ἐχρῶντο τοιαύταις:

さて我々は、彼 [= アリスティッポス (= Ar.)] の人生を描写し終えたので、今やよし、彼に由来する Cyr. の者たちのことを詳述するとしよう。彼らのうち、或る者たちは〈Heg. 派〉、また或る者たちは〈アンニケリス (= Ann.) 派〉、

また或る者たちは〈テオドロス (= Th.) 派〉などと自称している。[...] さてそれは、以下のごとくである：Ar. 門下であったのは、娘のアレテーと、プトレマイオスのアイティオプス、そして、キュレネのアンティパトロスである。そして、アレテーの弟子・Ar. は〈母に教えられた者〉と呼ばれ、その弟子の Th. は〈無神論者〉、のちに〈神〉と呼ばれた。また他方、アンティパトロスの弟子はキュレネのエピティミデスであり、その弟子はパライバテス、さらにその弟子は、〈死への説得者〉Heg. と、〈プラトンの解放者〉Ann. である。さてまず、Ar. の導きのうえにとどまり、「Cyr.」と呼ばれた人々は、次のような見解をとった。

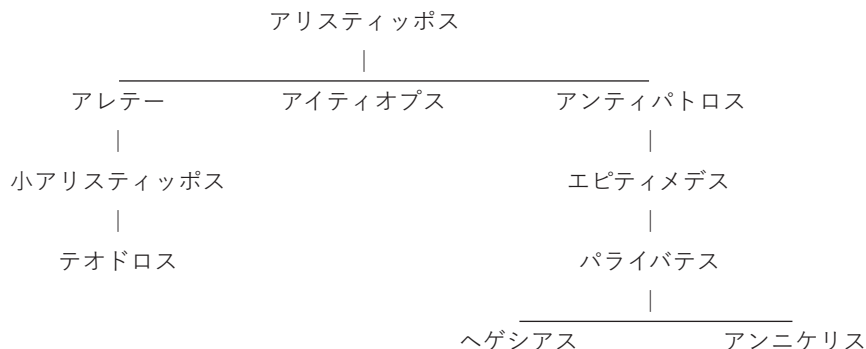
T. 1B : 『スーダ』「アリストイッポス」 = SSRIVA160 (Adler, 1971)

διήκουσε δὲ αὐτοῦ ἡ θυγάτηρ Ἀρήτη, ἀφ' ἧς ὁ παῖς αὐτῆς ὁ νέος Ἀρίστιππος, ὃς ἐκλήθη Μητροδίδακτος, οὗ Θεόδωρος, ὁ Ἄθεος ἐπικληθεὶς, εἴτα Θεός: τοῦ δὲ Ἀντίπατρος, τοῦ δὲ Ἐπιτιμήδης ὁ Κυρηναῖος, τοῦ δὲ Παραϊβάτης, τοῦ δὲ Ἡγησίας ὁ Πεισιθάνατος, τοῦ δὲ Ἀννίκερις, ὁ Πλάτωνα λυτρώσαμενος.

また、娘アレテーは、彼 [= Ar.] の門下であった。その弟子は彼女の子である小 Ar. であり、彼は、〈母に教えられた者〉と称された。その弟子は Th. で、彼は〈無神論者〉、のちに〈神〉と呼ばれた。また、アンティパトロスも彼 [= Ar.] の門下であった。その弟子がキュレネのエピティメデスで、その弟子がパライバテス、さらにその弟子が〈死への説得者〉Heg.、さらにその弟子が〈プラトンの解放者〉Ann. である。

資料の性質 T. 1A は『哲学者列伝』 (= DL; 3 世紀 CE 頃) における Ar. 伝の最末尾に置かれたテキストで、後続する学説誌的記述との結節点にあたる。Cyr. の後継者・後継学派の名称が列記されており、そのなかに、「Heg.」や「Heg. 派」といった名称が含まれている。10 世紀ビザンツの百科事典『スーダ』における説明 (T. 1B) との酷似は、両テキストが共通の資料を参照したもので

あることを示唆する⁵。それゆえ、両者を互いに独立の証言として扱うことは推奨されない (Lampe, 2015: 203)。いずれにしても、T. 1 は Heg. の系譜的位置づけを伝える唯一の証言であり、彼が Cyr. の第五世代にあたることを示す。



もっとも、このような継承図式は、『系譜 (Λιάδοχαί)』と称された一連の文書群によって後代から編集・創作されたものにほかならず、歴史的な信憑性をめぐっては若干の警戒が必要となる。その一方で、Tsouna-McKirahan が強く主張したとおり、精確な歴史的事実を反映しているとは限らない継承図式も、思想上の類縁性を示唆するという意味では、なお啓発的なものでありうる (1994: 388ff)。

註解

1-1. Κυρηναίκοις, οἵτινες ... προσωνόμαζον (A) : Schwartz 以来、まとまった削除案が提出されてきた箇所 (1903: 758; Mannebach, 1961: fr. 133, ad loc.)。ギリシア語の記述に従うかぎり、Cyr. 全体が三つのセクトに余りなく分割されているように読めるが、この場合、「Ar. の導きのうえにとどまった人々」の存在が無視されてしまうことになる。Döring はこうした不整合を深刻に捉える一方で、Schwartz 流の大規模削除案には反対し、οἵτινες を οἱ τ' と読み替える

穏健な選択肢を提示した(1988: 34)。とはいえ、大小いずれの校訂案にしても、写本上の根拠を一切欠いている点には変わりがない。それゆえ、当該箇所は、論理的に厳密な読みを要求しないルーズな記述であるとしておくのが穏当だと思われる (cf. Laks, 2007: 22, n. 24)。

1-2. οἱ ... Ἡγησιακοὺς (A) : 「Heg. 派」という名称は彼が独自の学派を形成していた事実を示唆するが、DL 第二巻以外の資料にはパラレルな用例が見出されない。それゆえ、当該語句は、「Ann. 派」や「Th. 派」といった対語に引きずられた便宜的表現である可能性も否定できない。

1-3. οἱ ... Ἀννικερείους / οἱ ... Θεοδορείους (A) : ヒッポボトス著『諸学派について (*Περὶ αἰρεσέως*)』(3 世紀 BCE 末) は、倫理学の九大学派のうちに、「Ann. 派」と「Th. 派」の二派を数え入れている (DL1.19)。「Heg. 派」の奇妙な不在は、彼らが「Cyr. の本流 (mainstream Cyrenaicism)」を自任していた結果であるかもしれない (Lampe, 2015: 21)。この場合、ἐαυτοὺς ... προσωνόμαζον (自称する) という表現を「Heg. 派」にも適用したのは、DL の不注意によるものであったということになる。

1-4. Ἡγησίας ὁ Πεισιθάνατος (A, B) : T. 5 を参照のこと。

1-5. οἱ ... ἐπὶ τῆς ἀγωγῆς τῆς Ἀριστίππου μείναντες καὶ Κυρηναῖκοι προσαγορευθέντες (A) : 「Ar. の導きのうえにとどまった人々」が個別に紹介されていることから、少なくとも DL (およびその原資料) にとっては、「Heg. 派」と Cyr. 本流との相違が自明のものであったのだと推測される。とはいえ、Laks が強調するとおり、Heg. はなおも Cyr. の一員にほかならないのであって、両者間の基本的な共通性を見落としてはならない (1993: *pass.*, esp. 35)。Laks の挙げる「共通学説」は、以下の三点である：1. 「個的快乐の総和」としての幸福観 (cf. T. 3)；2. 身体的快乐／精神的快乐の区別 (cf. T. 2)、3. 快乐の管理 (*gestion*) という発想 (cf. T. 6)。Zeller や Zilioli も、Heg. の思想が Cyr. 本流の基本線を大枠において維持している点を示唆している (Zeller, 1877: 380; Zilioli, 2011, 178-9)。ただし他方で、Heg. の思想が Cyr. 哲学の「極端な反転」

にあたるとする評言 (Long, 1999: 638) にも、幾ばくかの真実が含まれていると見るべきであろう。重要なのは、両者間の微妙な関係を、不偏の視座から見極めることである。

T. 2 目的

T. 2: ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』2.93, 95-6 = SSRIVF1 (Dorandi, 2013)

οἱ δὲ Ἡγησιακοὶ λεγόμενοι σκοποῦς μὲν εἶχον τοὺς αὐτούς, ἡδονὴν καὶ πόνον. [...] τὸν τε σοφὸν οὐχ οὕτω πλεονάσειν ἐν τῇ τῶν ἀγαθῶν αἰρέσει, ὥς ἐν τῇ τῶν κακῶν φυγῇ, τέλος τιθέμενον τὸ μὴ ἐπιπόνως ζῆν μηδὲ λυπηρῶς: ὁ δὲ περιγίνεσθαι τοῖς ἀδιαφορήσας περὶ τὰ ποιητικὰ τῆς ἡδονῆς.

さて、Heg. 派と呼ばれる人々は、一方で、同じもの——快樂と苦痛——を眼目としていた。[...] また知者は、善きものどもを選択するさい、悪しきものどもを回避する場合と同じ仕方では、矩を踰えたりしないであろう。彼が、苦痛や心労のない生をテロスだとしている以上は。実のところ、かかる生は、快樂を作り出すものどもに関心を覚えなくなった後、結果として生ずるものなのだと。

資料の性質 T. 1A の直後で Cyr. 本流の学説が紹介されたあとに続く箇所。「Heg. 派」の学説紹介が展開され、その後は Ann. 派の学説紹介に移る。かつて Mannebach は、Heg. 派の学説誌と Ann. 派の学説誌の順番を入れ替えるという大胆な校訂案を提出した (1961: 44, 94) が、現在ではほとんど受け入れられていない (Ginnantoni, 1990, v. 4: 136; Goulet-Cazé et al, 1999: 301-2, n. 5; Zilioli, 2011: 198-9, n. 3)。Mannebach の提案は、両派の学説誌の冒頭に置かれた記述——DL2.93: 「Heg. 派と呼ばれる人々は、一方で、同じもの (τοὺς αὐτούς) を眼目としていた」、DL2.96: 「他方 Ann. 派は、その他の点では、如

上の人々と同じ考えに従っていた (κατὰ ταῦτὰ τούτοις) —— が写本通りの順序では理解しにくくなるという点を踏まえたものであるが、これほどの大校訂に着手する理由として、あまりにも弱い。DL の記述は原型のままで十分理解可能である。

註解

2-1. σκοποὺς μὲν εἶχον τοὺς αὐτοὺς, ἡδονὴν καὶ πόνον : 「眼目 (σκοπός)」という語は、Cyr. の証言全体を見渡してもこの箇所にしか現れない。Cyr. 本流は快楽を「テロス (終極目的:τέλος)」と見なしていた (DL2.87-8 = SSRIVA172) が、ここでは、快・苦が併せて「眼目」とされている (cf. 註解 2-5)。後続する記述と照らし合わせるかぎり、Heg. が「テロス」と「眼目」を使い分けていたことは確実であろう。「眼目」の定義については、「テロス (la fin) を目指すさいに考慮されたり吟味されたりするもの」という Laks の説得的なパラフレーズ案がある (1993: 29)。当然ながら、快楽が「テロス」と呼ばれなかった事実は、Heg. 派による快楽の軽視を含意しない。

2-2. τὸν ... σοφὸν : 「知者」という表象はギリシア哲学全般にわたって頻出するが、Heg. の思想においても極めて重大な位置を占めている。彼に関する学説誌を検討するさいは、各教説の宛名が「知者」であるのか否かを逐一確認する必要がある。なお、キュニコス派や Th. の見解とは異なり、Heg. 的な「知者」は自足 (αὐτάρκειν) していない (Murray, 1893: 33-4)。

2-3. οὐχ οὕτω πλεονάσειν ἐν τῇ τῶν ἀγαθῶν αἰρέσει, ὥς ἐν τῇ τῶν κακῶν φωνῇ : Heg. は「悪しきものの回避」を「善きものの選択」よりも優先させていたらしい。これは、T. 3 で表明されるような悲観論を前提とした経験的教訓によるものであろう。

2-4. τῶν ἀγαθῶν / τῶν κακῶν : 後続する分詞句の内容 (「知者が、苦痛や心労のない生をテロスだとしている以上は」) を踏まえるかぎり、「善きものども」・「悪しきものども」は、「快」・「苦」にそれぞれ対応したものであると思われる。

2-5. τέλος：この箇所では、Cyr. の一般的な術語である「テロス」が導入されている。とはいえ、Cyr. のテロス観は諸証言のあいだで必ずしも一貫しておらず、慎重な取り扱いを必要とする。たとえば、セクストス・エンペイリコス (*adv. mathem.*, 7.199 = SSRIVA213) においては、「苦痛」や「中間的なパトス (情態)」までもが「テロス」のうちに数え入れられており、解釈上の一大論点となっている⁶。

もっとも、セクストス以外の証言における「テロス」は、大抵の場合、慣用的な「終極目的 (Ziel, Zweck)」としての意味を保存しているようである (cf. Döring, 1988: 18-9)。Cyr. 本流に帰された「快く生きること (τὸ ἡδέως ζῆν)」という「テロス」(Clem. Alex., *strom.*, 2.21.127 = SSRIVA198; Euseb., *praep. evang.*, 14.18.32) や、Ann. に帰された「部分的快楽 (ἡ κατὰ μέρος ἡδονή)」という「テロス」(DL2.87-8 = SSRIVA172; cf. Lampe, 2015: Appendix 2; Clem. Alex., *strom.*, 2.21.130 = SSRIVG4) は、いずれも「終極目的」を指し示す名辞として、ごく自然に理解されうる。当該箇所で言及された Heg. のテロス観についても同様であろう。Lampe は、Heg. によるテロス規定が、Cyr. 本流のそれと同じく、人生全体を見据えた「包括的な目的」である可能性を指摘している (2015: 122)。

2-6. τὸ μὴ ἐπιπόνως ζῆν μηδὲ λυπηρῶς：身体的な苦痛と精神的な苦悩が概念上区別されていたことを示唆する。なお、当該箇所で示された Heg. のテロス観は、DL2.89 (SSRIVA172; cf. Clem. Alex., *strom.*, 2.21.130 = SSRIVG4) におけるエピクロス批判⁷を回避することができる。なぜなら、Heg. が主張しているのはあくまでも「無苦痛・無苦悩な生」＝「テロス」という定式であって、「無苦痛・無苦悩」＝「快楽」という定式とは異なるからである。

2-7. τοῖς ἀδιαφορήσασιν: ἀδιαφορέω はストア哲学の術語として有名な「アディアフォラ」の動詞形で、「無関心でいる」という程度の意味。理想的な生が「アディアフォラ (外界への無関心)」を通じて実現されるという発想は、アンティステネスやアリストンなどの立場⁸とも類似しており、キュニコス派からの影

響が指摘される (Long, 1999: 637-8; cf. 註解 8-3)。

2-8. τὰ ποιητικά τῆς ἡδονῆς : 私秘的・内的な情態 (パテー : πάθη / 単数形パトス) と外的・客觀的事象との峻別は、Cyr. 認識論を特徴づける最も基底的な枠組みである。彼らによれば、「諸々のパテーこそが規準 (κριτήρια) であり、それらのみが把握されうる。そしてそれらは、欺くことのないもの (ἀδιάψευστα) である」(Sext. Emp., *adv. mathem.*, 7.191 = SSRIVA213)。かつて Brunschwig が述べたとおり、如上の認識論的テーゼには、un aspect positif (パテーのみが把握されうる) と un aspect négatif (パテーの^{のみ}が把握されうる) の二相が同居している (2001: 462ff)。これらのうち、本証言において Heg. が強調しているのは、後者の否定的なアスペクトのほうであろう。

なお、以上の認識論的テーゼに関連する論点として、Giannantoni は、セクストス・エンペイリコス (*adv. mathem.*, 6.53 = SSRIVA219) の報告が Heg. に帰されうる可能性を控えめに指摘している (1997: 185; cf. Mannebach, 1961: fr. 219) : 「キュレネ出身の哲学者たち (οἱ ἀπὸ τῆς Κυρήνης φιλόσοφοι) 曰く、パテーの^{のみ}が存立しており (ὑπάρχειν)、他には何もそうでない。それゆえ、音声もまた、パトスではなくパトスを作り出すもの (πάθους ποιητικὴν) である以上、存立するものどもには属さないのである」。用語上の類似は明らかであるが、Giannantoni 自身も認めている通り、決定的な証拠は存在しない。同様の言葉遣いは、DL2.90 = SSRIVA172 にも現れる (τὰ ποιητικά ἐνίων ἡδονῶν)。

T. 3 幸福の不可能性

T. 3 : ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』2.94 = SSRIVF1 (Dorandi, 2013)

τὴν εὐδαιμονίαν ὅλως ἀδύνατον εἶναι: τὸ μὲν γὰρ σῶμα πολλῶν ἀναπεπλησθαι παθημάτων, τὴν δὲ ψυχὴν συμπαθεῖν τῷ σώματι καὶ ταράττεσθαι, τὴν δὲ τύχην πολλὰ τῶν κατ' ἐλπίδα κωλύειν, ὥστε διὰ ταῦτα ἀνύπαρκτον τὴν εὐδαιμονίαν εἶναι.

「また、」幸福はまったく不可能である、と。そのわけは次の通りである。すなわち、①肉体が多くの厄介事で充たされている一方、②魂も肉体と共に苦しみ乱され、③そのうえ偶然が、希望どおりの事柄の多くを妨げてしまう。その結果、以上の理由からして、幸福は非実在のものなのだ。

資料の性質 DLにおける「Heg. 派」の学説誌から引かれた一節。Heg. の幸福論をまとめた形で伝える唯一の証言にあたる。なお、「幸福は非実在のものだ」というテーゼは彼の「悲観主義」を鮮烈に印象づけるが、彼はあくまでも生が無苦痛・無苦悩なものでありうる余地を認めている（T. 2）のであり、端的な「不幸（*unhappiness*）」へと退却しているわけではない（Lampe, 2015: ch. 7）。また、Tsouna-McKirahan が指摘しているとおり、Heg. の「悲観主義」は、「幸福主義的なパラメーター（*eudaemonistic parameters*）」を想定することによって初めて理解可能なものとなる。彼は、人生全体の質に対する根底的な関心を確かに有していた（2002: 474ff）。

註解

3-1. τὴν εὐδαιμονίαν ὅλως ἀδύνατον εἶναι: 「幸福は不可能である」というテーゼをめぐるのは、これまで、キュニコス派のクラテスとの間テキスト的關係が想定されてきた（Mannebach, 1961: 109; Long, 1999: 638; Lampe, 2015: 122-3）。クラテス曰く、「もし我々が幸福な生を豊富な快楽の集合から構成せねばならないのだとしたら、幸福になれる者など、誰ひとりとして存在しないことになるであろう。むしろ、全人生のあらゆる期間を見積ろうと望めば、[快楽よりも]ずっと多くの苦痛を見て取る羽目になる」（Teles, fr. 5 Hense = SSRVH45）。ここで注意すべきは、快楽に代わる幸福達成へのバイパス（たとえばキュニコス派における「徳」）を、Heg. が一切想定していないという点である。この点において彼は、クラテスとは対照的に、快楽主義の立場を堅持している。

3-2. παθημάτων ... συμπαθεῖν: キュレネ派認識論の術語 πάθος (cf. 註解 2-8)

との関連が推測される。πάθοςは文脈によっては「苦難」とも訳しうる語であり、そうした否定的な含意が前面に押し出されている。

3-3. τὴν ... τύχην πολλὰ τῶν κατ' ἐλπίδα κωλύειν : 運や身体性といった外的事象への注目（それらは認識されえないが、我々に確実な影響を及ぼしている）は、Heg. 哲学の印象的な特徴である（Murray, 1893: 33-4）。未来の不確定性に関する洞察は、ギリシアの大衆にとってもお馴染みのテーマであった（Dover, 1974: 138-41）。

3-4. ἀνύπαρκτον τὴν εὐδαιμονίαν εἶναι : Heg. にとって、幸福は端的に存在しない。ὕπαρχω 系統の存在論的語彙の多用は、Heg. の学説紹介全体を貫く特徴である。そのため、こうした語用は、彼自身の著作（あるいは講義）を起源とする可能性が高い。

T. 4 生と死

T. 4A : ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』2.94, 95 = SSRIVF1 (Dorandi, 2013)

τὴν τε ζῶην καὶ τὸν θάνατον αἰρετόν. [...] καὶ τῷ μὲν ἄφρονι τὸ ζῆν λυσιτελεῖς εἶναι: τῷ δὲ φρονίμῳ ἀδιάφορον.

生も死も双方選ばれるのだと。[...] また、生きることは、愚者にとって有益である一方、思慮ある者にとっては無記なのだ。

T. 4B : エピファニオス『パナリオン』3.2.9 = SSRIVF2 (Giannantoni, 1990)

ἔλεγε δὲ καὶ τῷ φαύλῳ ἀνδρὶ λυσιτελεῖς τὸ ζῆν, τῷ δὲ σοφῷ τὸ ἀποθανεῖν, ὥς τινας ἐκ τούτου πεισιθάναντον αὐτὸν καλέσαι.

他方彼 [= Heg.] は、生きることが、低劣な者にとっても有益であり、知者にとっては、死ぬことがそうなのだと言った。ひとはこのゆえに、彼を「死への説得者」と呼んだほどであった。

資料の性質 T. 4A は DL における「Heg. 派」学説誌の一節。T. 4B はサラミスの司教エピファニオスが 374-377CE に著した異端論駁の書『パナリオン』の一節。Lampe は、エピファニオスによるギリシア哲学の紹介が「微妙な誤りと劇的な誤りの両方 (both subtle and spectacular errors)」を含んでいると指摘し、本証言に関しても一定の歪曲を想定している (2015: 205-7)。実際、T. 4A と T. 4B の記述は、互いに平仄が合わない。

註解

4-1. τήν τε ζωὴν καὶ τὸν θάνατον αἰρετόν (A) : Grilli は ζωὴν のあとに φευκτὴν を補って考える (Dorandi, 2013: ad loc.)。この場合、「選ばれる」のは俗人の歪んだ生ではなく知者の自然的な生だということになると思われる。これに対し Lampe は、知者／非知者の別に関わらず、生や死が状況に応じて選ばれたり選ばれなかったりするのだと解釈している (2015: 126)。いずれにしても、Heg. が生を死よりも低く見ているというわけではない点に留意すべきであろう。

4-2. τῷ μὲν ἄφρονι τὸ ζῆν λυσιτελεῖς εἶναι (A): τῷ ἄφρονι を τισι τῶν ἄφρων (愚者のうちの一部) と読み替えたり、δοκεῖν (…と思われる) を補ったりする誘惑に駆られる箇所だが、そうした改訂を支持する異読は存在しない。Lampe は、テキスト上の有力な根拠がないことを認めたとうえで、「愚者はまさしく知者になることで (precisely by becoming wise) 利益を得る可能性がある」という技巧的な解釈を提出している (2015: 126-7)。

4-3. τῷ δὲ φρονίμῳ ἀδιάφορον (A) : 「生きることがアディアフォラだ」という主張は 4-1 と矛盾しているように見えるが、自体的な「生そのもの」と、そのうちで経験される諸々の快苦を内包した広義の「生」とを区別することで、一応の調停が為されうるであろう。

T. 5 自殺の講説

T. 5A: キケロ『トゥスクルム荘論集』1.34.83-4 = SSRIVF3, 4 (Douglas, 1985)

A malis igitur mors abducit, non a bonis, verum si quaerimus. Et quidem hoc a Cyrenaico Hegesia sic copiose disputatur, ut is a rege Ptolemaeo prohibitus esse dicatur illa in scholis dicere, quod multi iis auditis mortem sibi ipsi consciscerent. Callimachi quidem epigramma in Ambraciotam Cleombrotum est, quem ait, cum ei nihil accidisset adversi, e muro se in mare abiecisse lecto Platonis libro. Eius autem, quem dixi, Hegesiae liber est, Ἀποκατερῶν, in quo a vita quidam per inediam discedens revocatur ab amicis, quibus respondens vitae humanae enumerat incommoda. Possem idem facere, etsi minus quam ille, qui omnino vivere expedire nemini putat.

それゆえ、「死」は、[我々を] 善きものではなく悪しきものから連れ出してくれるのだ——我々が真実を求めているのだとすれば。実際このことは、Cyr. の Heg. によって十全に論じられた。彼がプトレマイオス王から、講義でそれらの問題について語るのを禁じられた——多くの者たちがそれらを聴くことで自殺するに至ってしまった、というかどで——と言われるほどに。実際、アンブラキアのクレオンプロトスに寄せられたカッリマコスのエピグラムがあり、それによると彼は、何も不幸などなかったのに、プラトンの書を読んだあと、城壁から海に身を投げたのだという。また、先述した Heg. には『餓死する者』という一書があり、そのなかで、或る者が断食により命を絶たんとしたところを友人連中に引き留められたさい、その者たちに応えて、人生のさまざまな災難を数え上げている。私だって同様に振舞うことができるが、彼ほどではない。というのも彼は、生きることが、誰にとっても全然有益ではないと考えているのだ。

T. 5B: ウァレリウス・マクシムス『記憶すべき言行録』 8.9 ext. 3 = SSRIVF5 (Briscoe, 2019)

Quantum eloquentia ualuisse Hegesian Cyrenaicum philosophum arbitramur? qui sic mala uitae repraesentabat ut eorum miseranda imagine audientium pectoribus inserta multis uoluntariae mortis oppetendae cupiditatem ingeneraret: ideoque a rege Ptolemaeo ulterius hac de re disserere prohibitus est.

我々は、Cyr. の哲学者 Heg. がどれほど雄弁に長けていたと判断するのか。彼は人生の諸悪を描写した。——それら「諸悪」の悲惨な像が聴講者たちの心中へと入りこむことで、自発的な死への欲望が、多くの人々のうちに植えつけられるほどに。それゆえ彼は、プトレマイオス王から、かかる問題についてそれ以上論じることを禁じられたのである。

T. 5C: プルタルコス『モラリア』 497d = SSRIVF6 (Paton et al., 1972)

Ἡγησίας <δὲ> διαλεγόμενος πολλοὺς ἔπεισεν ἀποκαρτερεῖσαι τῶν ἀκρωμένων.

また、Heg. は、対話をすることで、聴講者たちの多くに餓死するよう説得した。

資料の性質 T. 5A はキケロの代表的な哲学著作『トゥスクルム荘論集 (*Tusculanae Disputationes*)』(45BCE) 第一巻のうちの一節。「死は悪しきものだ」というテーゼが論駁される過程で、「たとえ魂が消滅するとしても死は悪でない」という補題が検討される。死が一般に悪だと見なされるのは、それが我々を善きものどもから引き離してしまうかのように思われるからである。しかしながら、実のところ死は、我々をむしろ、悪しきものから (a malis) 引き離してくれるのである。Heg. に関する挿話は、以上のような議論を補強するための素材として利用されている。

T. 5B は元首政期ローマの著述家ウァレリウス・マクシムスの逸話集『記憶すべき言行録 (*Facta et Dicta Memorabilia*)』(30 / 31CE) のうちの二節。前後

の箇所では雄弁 (*eloquentia*) がいかに大きな力を有しているかを示す実例が列挙されており、そのうち、異国 (ギリシア) から採られた第三の例が、Heg. のエピソードに該当する。

T. 5C はプルタルコス『モラリア』所収の一篇「子孫への愛情について (*De amore prolis*)」から引かれた一節。「人はみな自分自身に対する本性的な愛を有している」というテーゼの反例のひとつとして、Heg. の逸話がごく簡潔に紹介される。とはいえ、それらの例は、「人を自然本性から連れ去ってしまうような魂の病的状態の類」(497d) に他ならないのであって、初頭のテーゼを否定する決定打とはなりえない。

註解

5-1. *rege Ptolemaeo* (A, B) : 絶対的な確証はないが、エジプトのプトレマイオス 1 世 (在位 305-282BCE) を指すと見て間違いのないと思われる (Douglas, 1985; Döring, 1998; Davie, 2017)⁹。当時のキュレネは、彼の支配下に置かれていた (Davie, 2017: 202)。彼との交渉をめぐる報告から、Heg. の盛年が 4 世紀末～3 世紀初め BCE に位置していたことが分かる。Dorandi は端的に 290BCE 頃と見積もっている (1999: 47, 52) が、何を根拠にしているのか不詳。Lampe は幅広く 320-290BCE 頃としている (2015: 21)。

5-2. *dicatur* (A) : 「…と言われる」という留保的な表現から、前後の証言が単なる又聞き of 報告であることが明示される。これに対し、証言後半部の “*Ἀποκατερω̃ν*” をめぐる記述は、キケロ自身が一書の内容にアクセスできたことを示唆しているように見える (Murray, 1893: 27; Lampe, 2015: 127-8)。

5-3. *multi iis auditis mortem sibi ipsi consciscerent* (A) : Lampe は、聴講者の多くが実際に自殺してしまったというエピソードを文学的な虚構と見なす (2015: 127-8)。他方で我々は、『若きウェルテルの悩み』や Sylvia Plath の詩を読んだ者たちが現に幾人も自殺したという事実を念頭に置く必要があるかもしれない (Annas, 1993: 233, n. 690)。Matson は、「自殺の勧奨」が Cyr. 快

楽論の諸前提から「無慈悲に (ruthlessly)」演繹されるとし、逸話の虚構性には言及しない (1998)。こうした見解に対する Lampe の反対論拠として、註解 4-1 をも参照のこと。

5-4. Ambraciotam Cleombrotum (A) : 諸写本の読みが割れており、Theombrotum とする校本もあるが、詳細は不明 (木村 & 岩谷, 2002: 69)。

5-5. Platonis libro (A) : 『パイドン』を指すのではないかと思われる。Gronewald は、T. 9 のパピュルス断片に同対話篇の議論との類似性を見出している (1985: 48-9)。

5-6. Αποκατερω̃ν (A) : Matson は、対話篇の語り手と Heg. の立場とを同一視し、一書のなかで「自殺すべきだ」という積極的な主張が為されていたのだと考える (1998)。これに対し Lampe は、Heg. が「死」を善悪無記なものと見なしていた点を強調し、積極的な自殺の勧奨はありえないと反論する (2015: ch. 7; cf. T. 4)。ともすると、Heg. の執筆動機は、死への恐怖を取り除こうとする前向きなものであったかもしれない (Sedley, 2017: 97)。

5-7. vitae humanae enumerat incommoda ... omnino vivere expedit nemini putat (A) : T. 3, 4 を参照のこと。

5-8. eloquentia (B) : 説得や雄弁の技術は、Ar. 以来、Cyr. の重要な研究領域のひとつであったと考えられる。状況適応能力の重要性を説いた Ar.¹⁰ が、対人的な話術に関心を有していなかったとは想定しがたい。同様の関心は、アンティステネスやアイスキネスといった他の同時代人たちによっても共有された (Boys-Stones & Rowe, 2013: ch. 1)。

5-9. διαλεγόμενος πολλοὺς ἐπεισεν ἀποκατερῆσαι τῶν ἀκροωμένων (C) : Heg. が自殺の勧奨を行っていたように読める箇所だが、実際は、ὁ Πεισιθάνατος という綽名 (cf. T. 1) や Αποκατερω̃ν という書名、同書が対話篇 (διάλογος) であることなどをほのめかした修辞表現であろう。いずれにせよ、プルタルコスの記事は、独立の資料として用いるのが躊躇われるほど簡略である。

T. 6 友愛と好意の否定

T. 6A: デイオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』2.93, 95 = SSRIVF1
(Dorandi, 2013)

μήτε δὲ χάριν τι εἶναι μήτε φιλίαν μήτε εὐεργεσίαν, διὰ τὸ μὴ δι' αὐτὰ ταῦτα αἰρεῖσθαι ἡμᾶς αὐτά, ἀλλὰ διὰ τὰς χρείας αὐτῶν ὧν ἀπουσῶν μὴδ' ἐκεῖνα ὑπάρχειν. [...] τὸν τε σοφὸν ἑαυτοῦ ἔνεκα πᾶν πράξειν: οὐδένα γὰρ ἡγεῖσθαι τῶν ἄλλων ἐπίσης ἄξιον αὐτῷ. κἂν γὰρ τὰ μέγιστα δοκῇ παρ' αὐτοῦ καρποῦσθαι, μὴ εἶναι ἀντάξια ὧν αὐτὸς παρίσχει.

しかし他方、好意、友愛、親切といったようなものは、いずれも存在しないのである。というのも、我々はそれらを、それら自身のためでなく、それらの効用——これがなければ、かのものどもも存立しない——のために選ぶのであるから、と。[...] また、知者は万事を自分自身のために行うであろうと。なぜなら彼は、余人のうちの誰ひとりとして、自分並みに価値があるとは思われないからである。なんとなれば、その人から最大の成果が得られるように見えたとしても、それは自分の提供するほどの価値ではないというので。

T. 6B: エピファニオス『パナリオン』3.2.9 = SSRIVF2 (Giannantoni, 1990)

Ἥγησίας Κυρηναῖος. οὗτος ἔφη μήτε φιλίας μήτε χάριτας εἶναι' μὴ ὑπάρχειν γὰρ αὐτὰς ἔλεγεν, ἀλλὰ χρήζων τις ἔδωκε χάριν ἢ κρεῖττόν τι παθὼν εὐεργετῇ.

キュレネの人 Heg.。彼は友愛も好意も存在しないと語った。というのも彼は、それらが現に存立しないと言ったのである。しかし、ある人は好意が必要であると考えたり、あるいは、何かを被るさい、より強力なものに奉仕したりする。

資料の性質 T. 4 を参照のこと。Heg. の破壊的な友愛論について言及した証言で、幸福論と同じく、存在論的な語彙が用いられている点に注意を要する。

註解

6-1. μήτε δὲ χάριν τι εἶναι μήτε φιλίαν μήτε εὐεργεσίαν (A) : Th. の友愛論との接近が直ちに想起される。「ところで彼 [= Th.] は、それが愚者と知者いづれのうちにも存しないという理由で、友愛を否定していた。そのわけは次の通りである。すなわち、一方で愚者においては、効用が取り去られると、友愛も消えてしまう。他方、知者は自足しているため、[そもそも] 友人を必要としない」(DL2.98 = SSRIVH13)。これに対し、同じ Cyr. の内部でも、たとえば Ann. は、Heg. らと正反対の議論を展開していた。「また、友人を歓迎するのは、効用のためだけでなく——その場合、かかる効用が満たされなければ、[その人に] 注意を払うこともなくなるのだが——、生じている好意——そのためになら苦痛も忍ばれるような——のゆえにでもあると。なるほど、快樂はテロスとされており、それが奪われることは難儀であるけれど、それにもかかわらず、友人への愛情のため、喜んで[それに] 耐えるべきなのだ、と」(DL2.97 = SSRIVG3)。Laks は、Ann. の友愛論が Heg. への反論として提示されたものであったと想定している (1993: 35-6)。これに対し Goulet-Cazé は、Laks の議論に大筋で合意しつつ、両者の過度な対比には留保が必要であるとする。彼女の意見によれば、Cyr. 本流のネガティブな一面を継承したのが Heg.、ポジティブな一面を継承したのが Ann. である (1999: 193-4)。

6-2. διὰ τὰς χρείας (A) : 友愛を「効用」の枠組みで捉える発想自体は、プラトン (*Lys.*, 210c-d) ・クセノフォン (*mem.*, 2.7) ・アリストテレス (*eth. Nic.*, 1155b18-21) といった思想家たちに限らず、ギリシア大衆道徳のうちにも看取される (Dover, 1974: 277-8)。Heg. の特色は、こうした伝統を引き継いだうえで、「効用に還元される友愛など友愛でない」という規範的な主張を展開した点に求められるべきであろう¹¹。

6-3. τὸν τε σοφὸν ἑαυτοῦ ἔνεκα πᾶν πράξειν (A) : アリストテレス倫理学において友愛の一契機と見なされていた「平等性 (ισότης)」(*eth. Nic.*, 1156b35-6, 1157b36, 1159b2-4) が否定される。Heg. 的な知者は、有意義な互酬に参与す

ることができない。とはいえ、Lampe が指摘するとおり、キュニコス派的な「知者同士の友愛」は、Heg. による攻撃を免れることができるように見える (Lampe, 2015: 143ff; cf. 註解 7-1)。「知者の自足」を想定した Th. との相違に注意。

6-4. παρ' αὐτοῦ (A) : 主要写本はこの通り読んでいるが、αὐτοῦ の指示対象をとりづらいため、様々な校訂案 (παρά του Roeper, Dorandi: παρ' ἄλλου Menagius: παρ' αὐτοῦς Bredlow) が提出されている。本稿では、写本どおりの読みを極力尊重する立場から、αὐτοῦ が不特定の第三者をルーズに指示していることが文脈上明らかであると考え、παρ' αὐτοῦ を原形のまま保存する (cf. Goulet-Cazé et al, 1999: 302-3, n. 4)。

6-5. Ἡγησίας Κυρηναῖος (B) : Cyr. の Heg. の出身地を伝える唯一の証言だが、エピファニオスによる記述の正確性には疑いの余地もある。Κυρηναῖός (Cyr.) と Κυρηναῖος (キュレネの人) の微妙な相違に注意。

T. 7 寛容

T. 7 : ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』2.95 = SSRIVF1 (Dorandi, 2013)

ἔλεγον τὰ ἀμαρτήματα συγγνώμης τυγχάνειν: οὐ γὰρ ἐκόντα ἀμαρτάνειν, ἀλλὰ τινι πάθει κατηναγκασμένον. καὶ μὴ μισήσιν, μᾶλλον δὲ μεταδιδάξιν.

彼ら [= Heg. 派] は過誤を大目に見るべきだと言っていた。なぜなら、自発的に過ちを犯すのではなく、なんらかのパトスに強迫されて犯すものだからであると。また、[誰かを] 憎むのではなく、むしろ教え改めるのだと。

資料の性質 DL における「Heg. 派」学説誌のうちの一節。Heg. の寛容論に言及した唯一の証言。Zeller 以来、ソクラテス的テーゼとの類似が繰り返し指摘されてきた (1877: 382; Goulet-Cazé et al, 1999: 303, n. 3; Tsouna-McKirahan, 2002: 482; Lampe, 2015: 136)。

註解

7-1. ἔλεγον τὰ ἀμαρτήματα συγγνώμης τυγχάνειν : Tsouna-McKirahan は、この箇所では表明されているような寛容論の背景に、Heg. の人類愛的傾向を読み取ろうとした (2002: 481-2; cf. Dover, 1974: 201)。これに対し Lampe は、博愛精神というよりむしろ、叙事詩や悲劇の伝統に立脚した「英雄的孤立 (heroic isolation)」への選好を引き出そうとしている (2015: 142ff)。Lampe の仮説に従うならば、Heg. が「知者同士の友愛」を考慮しなかった (cf. 註解 6-3) のも、かかる個人的趣味に影響されたものだという運びになるであろう。Heg. の寛容論は敵対的相互関係の否定を意味するものであり、そのかぎりでは、友好的相互関係 (= 友愛) の否定 (cf. T. 6) と軌を一にした議論であった。

7-2. τινι πάθει: πάθος は Cyr. 認識論の最重要術語のひとつである (cf. 註解 2-8) が、ここでもそうした特別な含意が反映されているのかどうかは不明瞭である。Lampe は、passion という比較的緩い訳語を採用している (2015: 112, 242 n. 50)。

7-3. μὴ μισήσειν, μάλλον δὲ μεταδιδάξειν : F 写本は各不定詞を μισήσεις / μεταδιδάξεις と二人称単数形で読んでいるが、あまりに唐突で受け入れがたい。実際は、Lampe が指摘しているように、「彼ら (Heg. 派)」か「知者」が暗黙の主語になっていると見るべきであろう (2015: 242, n. 49)。

T. 8 その他の学説

T. 8A : Δειογενης・ラエルティオス『哲学者列伝』2.94, 95 = SSRIVF1 (Dorandi, 2013)

φύσει τε οὐδὲν ἡδὺ ἢ ἀηδὲς ὑπελάμβανον: διὰ δὲ σπάνιν ἢ ξενισμὸν ἢ κόρον τοὺς μὲν ἡδεσθαι, τοὺς δ' ἀηδῶς ἔχειν. πενίαν καὶ πλοῦτον πρὸς ἡδονῆς λόγον εἶναι οὐδέν: μὴ γὰρ διαφερόντως ἡδεσθαι τοὺς πλουσίους ἢ τοὺς πένητας. δουλείαν ἐπίσης ἐλευθερίᾳ ἀδιάφορον πρὸς ἡδονῆς μέτρον, καὶ εὐγένειαν δυσγενείᾳ,

καὶ δόξαν ἀδοξία. [...] ἀνήρουν δὲ καὶ τὰς αἰσθήσεις <ὡς> οὐκ ἀκριβοῦσας τὴν ἐπίγνωσιν, τῶν τ' εὐλόγως φαινομένων πάντα πράττειν.

彼ら [= Heg. 派] はまた、自然本性においては、快いものだったり不快なものだったりは何ひとつ想定しなかった。なぜなら、不足なり新奇性なり飽満なりに対し、ある人々が快さを覚える一方で、別の人々は不快な思いを抱くからである。[また、] 貧しさと豊かさは、快樂の説明に何も関係しないのだ、と。なぜなら、富者が快樂を感じる仕方は、貧者と変わらないからである。[また、] 隷属は自由と等しく快樂の規準に無関係であり、その点、権門も寒門と、名声も悪名と等しいのだと。[...] 他方彼らは、認識を正確にすることがないものとして、感覚をも退けた。また、理に適っていると見えることはすべて行うのだと。

T. 8B: ヘルクラネウム・パピュルス 1251 = SSRIVH30 (Indelli & Tsouna-McKirahan, 1995)

οἱ δὲ διὰ τὴν ἐμφαινομένην ἀοριστίαν ἅπασαν κενὴν τὴν λύπην καὶ [τὴν χ]αράν, ἦν ἡμεῖς δὴ λέγο[μεν, ἔδογ]μάτισαν: καὶ τὰς [ἀνθρώπων] πράξεις [...] μόνον τὴν εὐστάθεια[v].

別の人々は、明示されている不定性のゆえに、苦しみや愉しみ——まさしく我々 [= エピクロス派?] が語っているところのもの——はすべて空虚であるという教説を唱えた。[人々の] 諸実践も [単なる] 静止 (安定状態) [にすぎない] のだ、と。

資料の性質 T. 8A は DL における「Heg. 派」学説誌のうちの一節。T. 8B はヘルクラネウム出土のパピュルス断片 (*PHerc*) で、1 世紀 BCE に活躍したエピクロス主義者フィロデモスの著書『選択と忌避について (*Περὶ αἰρέσεων καὶ φρογῶν*)』の一節と目される。Indelli & Tsouna-McKirahan は本証言が Heg. の学説を踏まえたものである可能性を指摘している (1995: ad loc.; Zilioli, 2015:

125) が、根拠薄弱のため同意できない¹²。参考のため、テキストと試訳のみを提示しておく¹³。

註解

8-1. φύσει τε οὐδὲν ἡδὺ ἢ ἀηδὲς ὑπελάμβανον (A) : この箇所が続く説明は、アイネシデモスによる懷疑論の第九トロポス (Sext. Emp., *pyrr. hypot.*, 1.141-4) と類似している (Long, 1999: 637-8)。主観的な快・不快と自然本性における快・不快との区別は、内的情態と外的事象の区別 (cf. 註解 2-8) に関連したものであろう。Cyr. 本流の学説誌においても、快苦経験の個人差が認められている (DL2.89, 93 = SSRIVA172)。

8-2. πενίαν καὶ πλοῦτον πρὸς ἡδονῆς λόγον εἶναι οὐδέν (A) : Zilioli は λόγος を calculus と訳し、プラトン (*Prot.*) における快樂計算との関係を推測する (2011: 208-9, n. 4) が、いくぶん無理のある読み筋であろう。試訳では Lampe (2015: 129) の訳語 account を採用した。

8-3. δουλείαν ... ἐλευθερίᾳ / εὐγένειαν δυσγενείᾳ / δόξαν ἀδοξίᾳ (A) : 人為的対立軸の相対化は、キュニコス派とも共通した特徴である (Long, 1999: 637; Goulet-Cazé, 1999: 195; cf. Zeller, 1877: 383)。ただし、Cyr. 本流は、悪名にともなう苦痛のゆえ、社会的慣習から逸脱した行為を極力避けていたらしい (DL2.93 = SSRIVA172)。「アディアフォラ」については註解 2-7 をも参照のこと。

8-4. ἀνῆρουν δὲ καὶ τὰς αἰσθήσεις <ὥς> οὐκ ἀκριβοῦσας τὴν ἐπίγνωσιν (A) : 「感覚がいつも真であるわけではない」 (DL2.93 = SSRIVA172) という Cyr. 本流の学説が根底にある。両者とも、外的事象に関する感覚を問題としているのが明らかである (cf. 註解 2-8)。

8-5. τῶν τ' εὐλόγως φαινόμενων πάντα πράττειν (A) : 主要写本はすべてこの通り読んでいるが、前節とのつながりが見えづらいため、種々の校訂案が提出されてきた。一例として、Madvig や Reiske は、τῶν ... φαινόμενων という複数属格を τῷ ... φαινόμενῳ という単数与格に置き換えて読む。この場合、当該箇

所の訳は、「理に適っていると見えるものによって万事を行う」「万事を行うにあたり、理に適っていると見えるものを用いる」といった形になるであろう。とはいえ、Lampe が指摘したとおり、Madvig らの校訂は写本の伝承過程における複数属格への変遷をうまく説明することができない (2015: 232, n. 74)。本稿の立場としては、写本通りの読みで文法上の困難が生じない以上、冒険的な校訂を行う必要はないと考える。

なお、Dorandi による最新の校訂本 (2013) は、πάντα πράττειν のあとに句読点を打たず、τῶν τ' εὐ. φ. π. πρ. ἔλεγον τὰ ἀμαρτήματα συγγνώμης τυγχάνειν (cf. T. 7) までを一節と見なしている。実際、ἔλεγον 以下には δὲ や τε といった接続の小辞が付されておらず、この箇所の直前でピリオドを打つことには若干の無理があると言わざるをえない。ともかく、Dorandi の句読法を採用した場合、訳文は以下のようになるであろう：「彼らは言っていた、すべてを理に適った仕方で行っているように見える人々の過誤については、これを大目に見るのだ、と」。しかしながら、こうした読みは、Heg. の寛容論 (T. 7) の射程を大幅に狭め、後続する理由説明 (γάρ) の眼目を理解不能なものとしてしまうように思われる。そのため、上に挙げたテキストでは、底本の句読法を離れ、πάντα πράττειν のあとにピリオドを打つ処置をとった (SSR をはじめ、多くの校本も同様)。接続の小辞をともなわぬ唐突な書き出しとしては、T. 3 第一文や本証言第三文・第五文にもパラレルな用例を見出すことができる。

なお、当該箇所の哲学的な解釈については、Lampe が興味深い整理を行っている (2015: 49ff)。彼によれば、τῶν τ' εὐλόγως ... πάντα πράττειν の節は、直前の節 (8-4) から帰結する問題——すなわち、決定や行為の基盤が失われてしまうこと——の解決策として読めるのだという。そもそも εὐλογος は、転じて「蓋然的」とも訳しうる語で、カルネアデスが提示した蓋然主義的生き方との関連が直ちに想起される。Cyr. は外界の認識可能性を否定したが、それにもかかわらず、蓋然性の基盤に立脚した日常的な暮らしを営むことができた。懐疑論者カルネアデスの生地がキュレネであったのは、この点、単なる偶然では

ないかもしれない。

T. 9 真正断片？

T. 9 : ケルン・パピュルス 205 = SSRIC550 (Gronewald, 1985; cf. Spinelli, 1992)

col. 1 [....]...[....]....[....]..δη.[....]τερεαιε.[..]ντοσ [τὴν α]ίτιαν ἡμῖν: [....]
ου προ.[..]με[....]ν τὴν α[.]εσιν [....].λείπομεν, ἀλ[....]η ἐκείνῳι [τῷ τ]
ἂ ἀπιθανὸς[τατα] λέγοντι ἐοι[....] - Νῆ τὸν Δία, του [....].ου....[..]
υειν: [....]υν εἰς ταύτην [τὴν] θεωρία[ν] ἀπε-[κλίν]αμενουν [....]
τῷ φρονίμῳι [..... ..].ου [.....]νανε.ιπο. [.....].τη..α. [..... ..]...
[..... ..]οτι [..... ..]...[.]αυ [.....]ωι βίῳι ε[.....] διότι εἰ [.....].ται ὁ βίος [..... ..]
ω.ψε. [.....]ται το.[.]. [.]...ν... αὐτοῦ .ι.. αποθνήσκειν μέλλον οὐκ ἐνοχλήσεται τὸν
ἡδύν τε καὶ σπουδ[δ]αῖον βίον καταλείπων: ἢ οὐ μνημονεύεις τούτ[ο]υ

col. 2 [γε ἔ]νεκ[εν] ἡμᾶς [εἰς τ]αύτ[η]ν τὴν [θεωρ]ίαν αποκλ[ί]ναν[τας]; - Ἀμέλει
[μν]ημονεύω τε κ[αὶ] ο[ἷ]δα ἀκριβῶς. - Οὐκοῦν ἄχρι γε τοῦ νῦν κατ' οὐθένα τῶν
λόγων δυνάμεθ' εὐρεῖν ὥς ὁ τοῦ νοῦν ἔχοντος βί[ο]ς ἡδίων[τις] <ν> ἐστί [..... ..] ἢ
ἐπιλυπότερος; - Οὐ γὰρ δὴ, μ[ὲ]ν τὸν Δία. - Οὐτ' ἄρα τ[άδ'] ἐκεῖνα [ἦ]ττον ἡδ[έ]α
ὄντα κα[τα]λείπειν λυπ[οῖ]τ' ἂν ὁ νοῦν ἔχω[ν] εἰ μέλλοι ἀποθ[ν]ήισ[κειν]. - Οὐ φ[αίν]
εται, ἐγὼ σοὶ [λέγ]ω. - Ἀλλὰ μὴν οὐ[δὲ] ἐκ[είνου] γε ἔνεκεν τοῦ μή τι ἐν Ἄιδου
δυσχερὲς ἔπη[ται], ἀποκνήσει ἀποθνήσκειν: οἶομαι γὰρ ἡμῖν ἐν τοῖς ἔμπροσθεν
δεδειχθαι, ὅτι οὐδενὶ οἷον τ[έ] ἐστι τῶν ἐν Ἄιδου οὐθέν δυσχερὲς [συμ]βαίνειν. -
Ἀμέλει κ[αὶ] τοῦτό μοι δοκεῖ ἱκανῶς ὑπὸ σοῦ δεδειχθαι. -

col. 3 [?]τ.[... ἐ]πιποθεῖς τιν[....]τῆς ἀπολογ[ία]. ἀκούσαι, ἦν ἀπ[....]ύμενόν με .
[....]αβες, δι' ἣν [αἰτία]ν οὐκ ἀπελ[ογ]ησάμην Ἀθη[ν]αίοις περὶ τῆς τοῦ θανάτου
δίκης; - Μὰ τὸν Δία, οὐκέ-τι ἔγωγε, ἀλλὰ ταῦτα μὲν ἅπαντα, ὧ Σώκρατες, ἐμοί
τε καὶ σοὶ καὶ τοῖς νομίζουσιν ἡδονὴν μὲν εἶναι [τέ]λος ἄριστον βίου, λύπην δὲ
κάκισ[το]ν δόξειας ἂν κ[α]λῶς ἀπολελογῆσθαι. διότι οὐκ ἀπελογήσω περ[ὶ] τ[ῆς] τοῦ

θαν[ά][του] δίκης: .[.][..]ν ἄλλοι γε τέλος τιθέμενοι τὸ καλὸν τε καὶ τὸν καλὸν βίον
ἄριστο[ν εἶ]ναι καὶ τὸ αἰσχρὸν [κ]αὶ τὸν αἰσχρὸν β[ί]ο[ν]ν κάκιστον οὐ β[ο]υλήσονται
ἡμῖν συ[νο]μολογεῖν, ὥς ἄρ[α], ἐπειδὴ ἐν ἡδονῇ[ι κ]αὶ λύπῃ οὐδὲ[ν] ἐλαττου[...]

[col. 1] [4 行判読不能] 私たちに理由を [2 行判読不能] 私たちは残すが [欠損] 最も信じがたいことを語っているあのの人に、たぶん [欠損]

——ゼウスに誓って [1 行あまり判読不能] 僕たちは、かかる考察のほうへと脱線した [欠損] 思慮ある人にとって [6 行あまり判読不能] 人生には [欠損] なぜなら [欠損] 人生が [2 行あまり判読不能] 彼の [欠損] まさに死なんとしている者は、快く優れた生を捨て去るとしても煩わされることがない。それとも君は、僕たちがかかる考察のほうへと脱線したのが他ならぬこのことのゆえだという次第を忘れてしまったのかね。

[col. 2] ——もちろん覚えていますとも。確かに承知しております。

——さて僕たちは、とにかく今に至るまで、いかなる議論に即してみても、知性を有する者の人生が [欠損] 一層痛ましいというよりは [欠損] 一層快いのだという由を、見出すことができていないわけだね？

——まさしく、ゼウスに誓ってその通りです [= 見出すことができていません]。

——してみると、知性を有している者は、今まさに死なんとしている場合であっても、それらのものどもを捨て去ることに心悩まされたりしないだろう。それらがあまり快いものでない以上は。

——はい。私に言わせれば、そのように見えます。

——さらにまた、彼は、冥界で何らかの困難がともなわれてくるのを防ぐために、死を避けたりはしないだろうね。というのも、思うに、先だって僕たちが示したところによると、困難な出来事は、冥界で暮らすいかなる人々においても、一切生じることがありえないのだから。

——無論、あなたはそのことについても十分お示しになったと思われます。

[col. 3] —— [欠損] 君はさらに望む [欠損] 弁明を聞くことを。その弁明

というのは〔2行ほど判読不能〕僕が死刑判決についてアテナイ人たちに弁明を行わなかったのは、そうした理由によるのだ。

——ゼウスに誓って、私もこれ以上は〔望み〕ません。むしろ、ソクラテス、あなたは、私にとっても、あなた自身にとっても、そして、「人生最高のテロスは快楽であり苦悩は最悪のものだ」と見なしている人々にとっても、以上の事柄すべてについて、立派な弁明をなされたように思います。なぜといってあなたは、死刑判決について弁明をなさらなかったからです。

——〔欠損〕とにかく、美と美しい人生とが最高のテロスであり、醜さと醜い人生とが最悪のものだと措定している他の人々は、僕たちに同意することを望まないだろう。快楽と苦悩のうちでは何も〔欠損〕より劣った〔欠損〕などと考えて。〔以下欠損〕

資料の性質 SSRではソクラテスの証言集（I）に採録されているパピュルス断片（PKöln）。内容上は、ソクラテスが裁判で自己弁護に努めなかったのは何故かという論点をめぐる対話篇の一部にあたる。Kölner PapyriのWebサイト（<https://papyri.uni-koeln.de/stueck/tm65714>：最終閲覧日2022年1月2日）にて、パピュルス原本のスキャン画像にアクセスすることが可能である。なお、欠損の多いテキストを扱うに際しては、Gronewald, 1985やSpinelli, 1992の復元案を随所で活用した。話者の切り替わりについては推測に基づく部分が少なくないものの、パピュルスの空白から一定の確信をもって判断できる場合もある。

作者をめぐる議論について：GronewaldとBarnesは、本対話篇の成立を4世紀BCE（断片そのものは3世紀BCE）としたうえで、Ar.およびアイスキネスのいずれか（とりわけ前者）が本対話篇の書き手であろうと推測する（Gronewald, 1985: 33-4, 49-53; Barnes, 1987: 365-6）。これに対しLampeは、「テロス」という比較的新しい術語の「カジュアル」な使用を理由に、対話篇の成立時期をより後代へとずれこませる必要があると反論している（2015: 136ff;

cf. Spinelli, 1992: 12)¹⁴。この場合、対話篇の書き手は、ソクラテスの直弟子たちよりも後の世代に属していなければならない。そして、本断片に通底している諦観的・快樂主義的な雰囲気を考え合わせれば、最有力の作者候補として、Heg. の名が浮上してくる (Spinelli, 1992; Lampe, 2015: 139-40; also cf. Gronewald, 1985: 52-3)。Lampe らの議論にはいささか強引な点が含まれてもいるが、Heg. への比定それ自体は、十分見込みの高いものであると思われる。

註解

9-1：本断片の論旨は概ね以下のとおりであろう（四角括弧内は筆者の推定による補い）。

[・大前提：知者は快樂主義者である]

- ・同意事項1：知者は、仮に快い生を過ごすのだとしても、死を恐れることがない（知者が死を恐れることになる蓋然性が最も高い假定条件の検討）
- ・同意事項2：そもそも、知者の生が快いものであるという確証はない
- ・1-2 からの帰結：よって知者は、[生者の観点に立つかぎり、] 死を恐れることがない
- ・同意事項3：死後の世界でも、困難な出来事が生じることはない[したがって知者は、死者の観点に立ったとしても、死を恐れることがない]

[・1-3 からの帰結：よって知者は、死を恐れることがない]

以後の議論では、上記の大前提を否認する反快樂主義の立場（「美・醜がテロスである」）が吟味・反駁されていくのだと思われる。

9-2. Οὐκοῦν ἄχρι ... ἐγὼ σοὶ [λέγ]ω：第二コラムの 43-58 行目については Spinelli の復元案（1992: 10-1）に概ね従うが、ἡδίστῳ{τι}<ν> ἐστὶ [..... ..] ἢ ἐπιλυπότερος の欠損部に τί λέγεις; を補う措置だけは、前後の文脈と齟齬をき

たすように思われるため採用しない。Spinelli の推測を全面的に受け入れた場合の訳は、以下のとおり：「あなたは何を言っているのです (Cosa dici?)。あるいは、一層痛ましいとでも？ ゼウスに誓って、そんなことは断じてありません」。

9-3. οὐδενὶ οἷόν τι[έ] ἐστι τῶν ἐν Ἅιδου οὐθὲν δυσχερὲς [συμ]βαίνειν : 死後の世界の幸福をめぐっては、Plat., *apol.*, 40bff が想起される (Gronewald, 1985: 42-3)。とはいえ、この対話篇で具体的にどのような論証が展開されたのかは不明である。

結びにかえて

最後に、Heg. 哲学の脈略をごく簡単に整理しておきたい。彼の「悲観的快楽主義」は、おそらく、以下の四前提に立脚している：

前提 1：「快楽主義」我々の実践における最も基礎的な考慮事項は快苦であり、それ以外ではない。

前提 2：「自閉的認識論」我々が認識しうるのは、我々自身のパトスだけである。

前提 3：「非利那主義」我々のテロスは、人生全体に関わる包括的なものである。

前提 4：「悲観論」人生全体における快の総量が苦の総量を超過することはない。

たとえば、「無苦痛な生がテロスである」という主張 (T. 2) は、次のような仕方で導出されうる：第一に、テロスの規定には、快苦のいずれかが含まれておらねばならない (前提 1 より)。第二に、テロスとは何らかの生である (前提 3 より)。第三に、快い生は端的に不可能である (前提 4 より)。したがって、

無苦痛な生がテロスである。

むろん、四前提の具体的運用は、「快苦」や「パトス」といった概念をどのように解釈するかによって、種々さまざまな形態をとりうる。その点、これらの前提は、さらに複数の基本前提から構成されたものだと見るべきかもしれない。とはいえ、概観的な整理を行うにあたっては、やはり、上述の四命題を補助線とするのが効果的であろう。

凡例

- ・外国語テキストの訳はすべて拙訳であるが、一部既訳の表現を参照した。
- ・古典資料の引用にさいしては、SSR (Giannantoni, 1990) の略称を踏襲した。ただし、ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』(Diog. Laert.) についてのみは、DL という略称を用いた。
- ・古代の人名に関しては原則としてカタカナ表記を用いるが、純粹のレファレンスを行う場合にかぎり、アルファベットでの略称表記を採用した。近代以降の人名については、現代の研究者も含め、すべて原語のまま表記した。
- ・その他、本稿独自の略称は以下のとおり：「キュレネ派」→「Cyr.」、「ヘゲシアス」→「Heg.」、「アリストIPPpos」→「Ar.」、「アンニケリス」→「Ann.」、「テオドロス」→「Th.」。

文献表

[テキストと翻訳]

- ・ A. Adler (ed.), 1971, *Svidae Lexicon*, vol. 1, Teubner.
- ・ J. Briscoe (ed.), 2019, *Valerius Maximus: Facta et Dicta Memorabilia*, Book 8, De Gruyter.
- ・ R. G. Bury (ed. & tr.), 1961-1987, *Sextus Empiricus*, 4 vols., Harvard University Press.
- ・ T. Dorandi (ed.), 2013, *Diogenes Laertius: Lives of Eminent Philosophers*, Cambridge University Press.
- ・ A. E. Douglas (ed. & tr.), 1985, *Cicero: Tusculan Disputations*, vol. 1, Aris & Phillips.

- ・ G. Giannantoni (ed. & tr.), 1958, *I Cirenaici*, G. C. Sansoni. 〈未見〉
- ・ G. Giannantoni (ed.), 1990, *Socratis et Socraticorum Reliquiae*, 4 vols, Bibliopolis.
- ・ M.-O. Goulet-Cazé, J.-F. Balaudé, L. Brisson, J. Brunschwig, T. Dorandi, R. Goulet, M. Narcy (eds. & trs.), 1999, *Diogène Laërce: Vies et Doctrines des Philosophes Illustres*, Le Livre de Poche.
- ・ M. Gronewald (ed. & tr.), 1985, '205. Sokratischer Dialog,' in M. Gronewald, K. Maresch, W. Schäfer (eds.), *Kölner Papyri (P. Köln)*, Bd. 5, Westdeutscher Verlag, pp. 35-53.
- ・ O. Hense (ed.), 1909, *Teletis Reliquiae*, 2nd ed., Mohr.
- ・ G. Indelli & V. Tsouna-McKirahan (eds. & trs.), 1995, *Philodemus: On Choices and Avoidances*, Bibliopolis.
- ・ 加来彰俊 (訳)、1984～1994 年、『ディオゲネス・ラエルティオス：ギリシア哲学者列伝』、全 3 巻、岩波文庫。
- ・ 金山弥平・金山万里子 (訳)、2004～2010 年、『セクストス・エンペイリコス：学者たちへの論駁』、全 3 巻、京都大学学術出版会。
- ・ 木村健治・岩谷智 (訳)、2002 年、『キケロー選集 12：トゥスクリム荘対談集』、岩波書店。
- ・ E. Mannebach (ed.), 1961, *Aristippi et Cyrenaicorum Fragmenta*, Brill.
- ・ M. Onfray (tr.), 2002, *L'Invention du Plaisir*, Livre de Poche.
- ・ W. R. Paton & M. Pohlenz & W. Sieveking (eds.), 1972, *Phutarchi Moralia*, vol. 3, Teubner.
- ・ S. Prince (ed. & tr.), 2015, *Antisthenes of Athens: Texts, Translations, and Commentary*, University of Michigan Press.
- ・ 戸塚七郎 (訳)、2000 年、『プルタルコス：モラリア 6』、京都大学学術出版会。

[二次文献]

- ・ J. Annas, 1993, *The Morality of Happiness*, Oxford University Press.
- ・ J. Barnes, 1987, 'Editor's Notes,' in *Phronesis*, 33, pp. 365-6.
- ・ R. Bett, 2015, 'Pyrrho and the Socratic Schools,' in U. Zilioli (ed.), *From the Socratics to the Socratic Schools: Classical Ethics, Metaphysics, and Epistemology*, Routledge, pp. 149-167.
- ・ G. Boys-Stones, C. Rowe (eds. & trs.), 2013, *The Circle of Socrates: Readings in the First-Generation Socratics*, Hackett.
- ・ J. Brunschwig, 2001, 'La théorie Cyrénaïque de la connaissance et le problème de ses rapports avec Socrate,' in G. B. Dherbey, J. B. Gourinat (eds.), *Socrate et les Socratiques*, Vrin, pp. 457-77.
- ・ J. Davie, 2017, *Cicero: On Life and Death*, Oxford University Press.
- ・ T. Dorandi, 1999, 'Chronology,' in K. Algra, J. Barnes, J. Mansfeld, M. Schofield (eds.), *The Cambridge History of Hellenistic Philosophy*, Cambridge University Press, pp. 31-54.
- ・ K. Döring, 1988, *Der Sokratischer Schüler Aristipp und die Kyrenaiker*, Akademie der Wissenschaft und der Literatur.

- K. Döring, 1998, 'Arstipp aus Kyrene und die Kyrenaiker,' in H. Flashar (ed.), *Grundriss der Geschichte der Philosophie. Die Philosophie der Antike Bd.2/1 : Sophistik, Sokrates, Sokratik, Mathematik, Medizin*, Schwabe, pp. 246-66.
- K. J. Dover, 1974, *Greek Popular Morality: In the time of Plato and Aristotle*, Blackwell.
- G. Giannantoni, 1997, 'Il concetto di αἰσθησις nella filosofia cirenaica,' in G. Giannantoni, M. Narcy (eds.), *Lezioni socratiche*, Bibliopolis, pp. 181-203.
- R. Goulet, 2000, 'Hégésias de Cyrène,' in R. Goulet (ed.), *Dictionnaire des philosophes antiques*, vol. 3, Centre national de la recherche scientifique, pp. 528-9.
- M.-O. Goulet-Cazé, 1999, 'Les Socrates et leurs disciples,' in Goulet-Cazé et al, 1999, pp. 172-208.
- A. Laks, 1993, 'Annicéris et les plaisirs psychiques. Quelques préalables doxographiques,' in J. Brunschwig, M. C. Nussbaum (eds.), *Passions & Perceptions: Studies in Hellenistic Philosophy of Mind*, Cambridge University Press, 18-49.
- A. Laks, 2007, 'Plaisirs cyrénaïques: Pour une logique de l'évolution interne à l'école,' in L. Boulègue and C. Lévy (eds.), *Hédonismes*, Presses universitaires du Septentrion, pp. 17-46.
- K. Lampe, 2015, *The Birth of Hedonism: The Cyrenaic Philosophers and Pleasure as a Way of Life*, Princeton University Press.
- A. A. Long, 1999, 'The Socratic Legacy,' in K. Algra, J. Barnes, J. Mansfeld, M. Schofield (eds.), *The Cambridge History of Hellenistic Philosophy*, Cambridge University Press, pp. 617-41.
- W. I. Matson, 1998, 'Hegesias the Death-Persuader; Or, the Gloominess of Hedonism,' in *Philosophy*, 73, 286, pp. 553-7.
- J. C. Murray, 1893, 'An Ancient Pessimist,' in *The Philosophical Review*, 2, 1, pp. 24-34.
- T. O'Keefe, 2015, 'The Sources and Scope of Cyrenaic Scepticism,' in U. Zilioli (ed.), *From the Socratics to the Socratic Schools: Classical Ethics, Metaphysics, and Epistemology*, Routledge, pp. 99-113.
- R. Reschika, 2020, 'Die Schule der Schwarzdenker – Hegesias von Kyrene und der moderne Pessimismus,' in D. Smiljanic (ed.), *Gotteshinterfragungen: Philosophische Beiträge zur Religionskritik*, Alibri Verlag, pp. 15-84.
- D. Sedley, 2017, 'Epicurean versus Cyrenaic Happiness,' in R. Seaford, J. Wilkins, M. Wright (eds.), *Selfhood and the Soul: Essays on Ancient Thought and Literature in Honour of Christopher Gill*, Oxford University Press, pp. 89-106.
- E. Schwartz, 1903, 'Diogenes Laertios,' in *Paulys Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, 1, pp. 738-763.
- 澁澤龍彦、1996 年、『快樂主義の哲学』、文春文庫。
- E. Spinelli, 1992, 'P. Köln 205: Il 'Socrate' di Egesia?,' in *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik*, 91, pp. 10-14.
- V. Tsouna-McKirahan, 1994, 'The Socratic Origins of the Cynics and Cyrenaics,' in P. A. Vander Waerdt

- (ed.), *The Socratic Movement*, Cornell University Press, pp. 367-391.
- ・ V. Tsouna-McKirahan, 2002, 'Is there an Exception to Greek Eudaemonism?' in M. Canto-Sperber, P. Pellegrin (eds.), *Le style de la pensée: Recueil de textes en hommage à Jacques Brunschwig*, Les Belles Lettres, pp. 464-89.
 - ・ E. Zeller, 1877, *Socrates and the Socratic Schools*, 2nd ed., O. J. Reichel (tr.), Longmans, Green, and Co.
 - ・ U. Zilioli, 2011, *The Cyrenaics*, Routledge.
 - ・ U. Zilioli, 2015, 'The Cyrenaics as Metaphysical Indeterminists,' in U. Zilioli (ed.), *From the Socratics to the Socratic Schools: Classical Ethics, Metaphysics, and Epistemology*, Routledge, pp. 114-133.

註

- 1 E. g. Murray, 1893; Reschika, 2020.
- 2 SSR 以前・以後では、パピュルス資料 (T. 8B; T. 9) の取り扱いに最大の落差がある。また、DL6.48 = SSRIVF7 (「Heg.」とシノベのディオゲネスとのやり取りを描いた逸話) については、シノベの Heg. (cf. DL6.84 = SSRVF1) が言及されているものと見なすべきだろう (Goulet, 2000: 529)。ディオゲネスの主要活動圏はアテナイおよびコリントスであるが、そのいずれについても、Cyr. の Heg. とは結びつかない地名である。
- 3 管見のかぎり、Cyr. の思想家を対象とした翻訳・註釈類は、Giannantoni の伊語訳 (1958; 註釈なし)、Mannebach の羅語註 (1961; Ar. が主対象であるため Heg. の扱いはごく限定的。翻訳なし)、Onfray の仏語訳 (2002; 註釈なし) の三例のみであり、いずれもパピュルス資料への言及を欠いている。SSR は概観的な Nota を付すのみで、翻訳や逐語的註釈を併載しない。
- 4 証言の選定にさいしては先行研究における明示的言及の有無を基準とし、恣意の混入をできるだけ避けた。
- 5 ただし、『スーダ』の記述はあまりにも簡略で、精確性を欠いている。『スーダ』に従うかぎり、Ann. は Heg. の弟子だということになる。

- 6 関連する用例として、Aristot., *rhet.*, 1.3.1358b20-9; 1.7.1364a31-3 を参照。また、T. 9 における用例も、「苦悩」を *κάκισ[το]ν* (τέλος) だとしている。
- 7 「苦しみの除去——エピクロスのもとで言われているような——は、彼らにとって、快楽ではないと考えられている。また、非快楽は苦痛でもない。なぜなら、両者 [= 快苦] は運動のうちに存するのだが、非苦痛や非快楽は運動でない、というのも、非苦痛はあたかも眠っているがごとき静止状態であるからだ、と」。
- 8 Cf. *DL*6.105 = t.135A Prince; Epictet., *dissert.*, 3.24.67-9 = t.34E Prince; *DL*7.160 = *SVF*1351.
- 9 ただし Briscoe は、ブトレマイオス 2 世の可能性を挙げてもいる (2019: 169)。
- 10 Cf. *DL*2.66 = *SSRIVA*51; *DL*2.68 = *SSRIVA*104; *DL*2.73 = *SSRIVA*120; Galen., *protr.* 5 et al. = *SSRIVA*50.
- 11 Cyr. 本流にも次のごとき教説が帰されている (*DL*2.91 = *SSRIVA*172): 「友人も効用のために (τῆς χρείας ἔνεκα) [選ばれる]。なぜなら、肉体の部分さえもが、現に助けとなるかぎりで歓迎されるものなのだから、と」。
- 12 Cf. O'Keefe, 2015: 103; Bett, 2015: 166, n. 42.
- 13 最終文の欠損箇所については、底本に記載された Schmid の復元案に従った。
- 14 他方で Gronewald はこうした用法がプラトンにまで遡りうると指摘しており (1985: 43-4)、この点に対する Lampe の反論 (2015: 139; プラトンでの用例は only incidentally なものにすぎない、とするもの) はあまりに牽強付会である。それゆえ、「テロス」という語の新規性を強調しすぎるのは危険であろう。

